

# 金沢

## かわら版

12

### 尾張町しこせ通りで

お殿様の墓り方に合わせるために、ここぞと金をかける。茶道具であれ、蒲元であれ、熊の衣装や道具であれ、敬慕して本物を金に釣かせずに集める。自分で使う場合も、献上する場合もある。

薄に根を下ろし、不可欠なものになっていったようだ。薄が金を出して職人を集め、工芸品を作らせた白工比類などもある。商人にとっては、半端でない

こだわりを持った品々が、美術品の価値をもって蔵に集まる

ことになる。ある時、傾きかけたしにせが、自分の店に代々伝わる蔵を開けて道具類を売ったところ、たちまちにして立ち直ったとか。

いつしか、加賀では財産を残すのに「金」と「土地」だけでなく、「道具」でも残すようになる。いわば、商人のたしなみとして当たり前になった次第。

道具を使う仕事も、信用を重んじる商いも、続けることが基本。ちよつとでもやめれば、それまでの苦労も元の木阿弥(もくあみ)になってしまふ。商いを「飽きない」といふのもうなすけるような気がする。

(石野 瑛一＝尾張町若手会)

### 財産の三分割

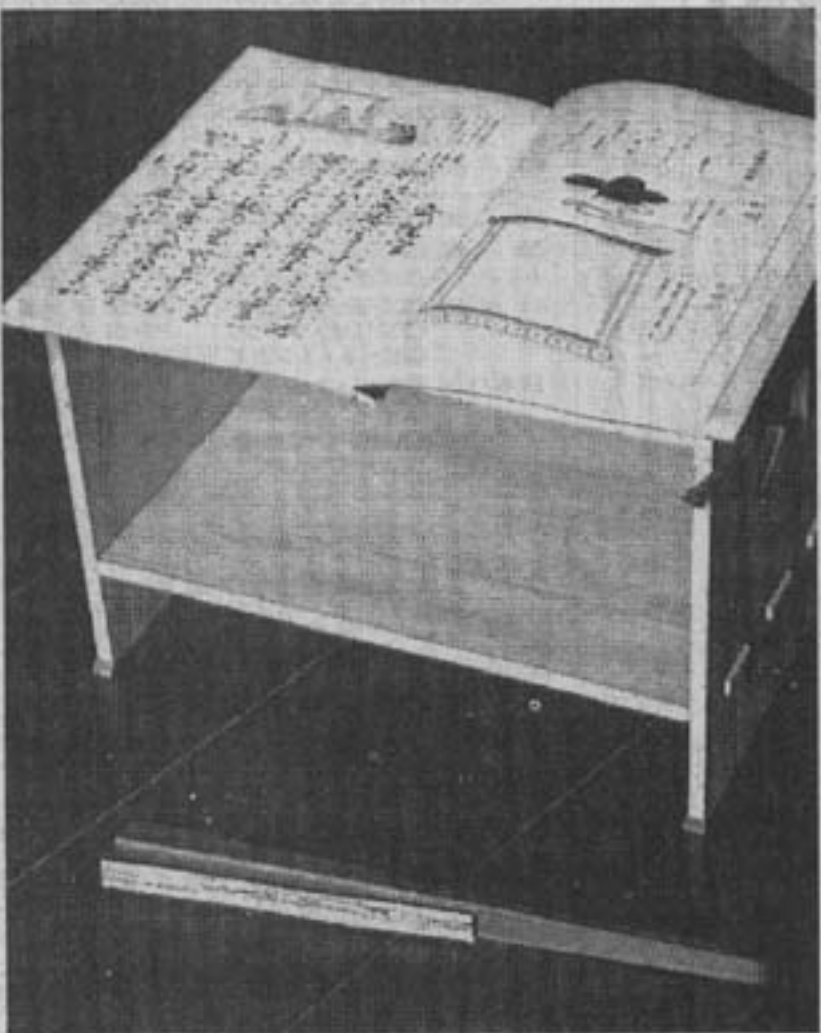
普通、商人は財産を「金」と「土地」にして残す。一般社会通念としては、最も確実に後世に伝えることが出来るからと信じられている。

商人にとっての価値とは、「縁結」と「信用」に裏付けられたもの。圖わくは子女孫々に至るまで続く、店の繁栄と社会への貢献を得られることだ。そのためにも、お客様との「コミュニケーション」を密接にして、いち早く求めるニーズを窺見することが重要となる。

加賀藩の場合、「文化」を油らかにしたい上げているだけに、お城の御用商人を自任する尾張町商人にもその美意識は求められる。茶道はもちろん、加賀宝生とまで言われるほどに盛んな能や謡が出来なければ一人前とはいえない。

例えば、「安永七年(一七七八)、林屋平太、金谷御殿において小説を試験され、翌日配膳(はいせん)奉行に命ぜられる」と加賀藩史料に書かれている。これなど、カラオケを歌ったら、上手なので翌日には早速宴会部長に取り立てられるというふうなもの。

かくはとくに、芸術は広く加賀



#### 見台

加賀藩に深く根を下ろした芸術。謡の見台(けんたい)、扇子、謡本も伝えられている